
炎の恨み ~ flame of grudge ~

菜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炎の恨み〜flame of grudge〜

【Nコード】

N0306E

【作者名】

菜花

【あらすじ】

ある凶悪犯が脱獄。コナンたちに降り注ぐ恐ろしい出来事。コナンになる可能性があり（恋愛中心ではありません） リクエスト作品

第一話　恨み

ある薄暗い部屋で二人のくぐもった声が聞こえてきた。

「やっと出られたな。」

「ああ」

「散々な目にあつたぜ。すべてあのガキのせいだな」

刑務所から脱獄してきた二人は倉庫で密談をしていた。

「今度は俺らがあいつらを楽しませてやるよ。とくに江戸川コナンと言つガキをな」

「ですね。俺らが味わった苦しみをあのガキにも味あわせてやるよ」

「まず今日の記念に乾杯といこう」

「そだな」

グラスにワインをいれ二人の笑い声が倉庫に広まった。

第一話　恨み（後書き）

新学期に入って更新が大幅におくれますがすみません。

コ哀といってもあまりないかもです

熱血蘭ファンのかたここでストップしてください。蘭ファンでも大丈夫というかたのみ前にお進み下さい。お願いします
苦情はうけつけません。
では

第二話　いつも通り？

（朝）

探偵団五人はいつものように登校した。

「なあ、最近全く依頼こねえよな」

「ですね。もっと依頼きませんかね」

「最近猫探ししかしてないもんね」

前に三人後ろに二人いういつもの並びで止まらない会話をしていた。

「おい、お前ら遅刻すんぞ」

コナンが腕時計を見ながら飽きれ顔になった。

（教室）

「ふう間に合ったな」

「ですね！」

「もうすぐ先生きちゃうよ！」

三人は少し廊下を走り教室にドタバタ入り席についた。

「あいつら相変わらず元気だな」

「まだまだ子供だもの。私たちと違って」
その後ろからコナンと灰原が入ってきた。

く昼休みく

コナンの席に四人が集まってきた。

「ねねコナン君！聞いて聞いて」

歩美がコナンにCDショップのチラシをみせた。

「two-mixの新曲！！明日発売だよ！！」

「おお、あの時いらいだな！」

「ねえ、あの時以来って？」

「あ！そうだ。哀ちゃん知らないんだった。えっとねー」

歩美たちはtwo-mixの誘拐事件を話した。

「そんなことあったの」

「うん！コナン君とつてもかつこよかったんだよ！」

「江戸川君が吉田さんに変装ねえ」

灰原はコナンにチラッと見て意味ぶかい笑みをみせた。

コナンは呆れた顔で三人をみていたが灰原と目が合った。

「んだよオメー」

「なにもただ女装も貴方の十八番お十八だったんだなあって思っただけ」

意味深い笑みは楽しそうな笑みに変わっていた。

「ちげーよ。あんときはああするしかなかったんだ」

「そう？内心楽しかったんじゃないの？」

「んなわけねえだろ」

「あ！チャイムなりますよ！」

光彦の言葉通りチャイムがなり四人はそれぞれ自分の席についた。
コナンは大きな溜め息を付き先生がくるのをまつた。

（帰り道）

行きと同じ並びで五人は歩いていた。

「じゃあな」

「コナン君灰原さんまたあした会いましょう」

「じゃあね！ バイバイ」

「おう（ええ）」

三人と別れコナンと二人つきりになりそれぞれの家に足を運んでいた。

「ぎゃあああ！ー！」

裏通りの方から女性の悲鳴がきこえた。

「あっちか！」

コナンは一気に走って行った。

「ちょっと工藤君！？」

灰原も数秒おくれてコナンの後を追った。

第二話〜いつも通り？〜（後書き）

第二話きました。

春休みのうちに出来るだけ更新したいとおもいます。

今回いつも日常でしたね！

これから事件が起きます！

犯人分かるかたいますか？

では

第三話　事件発生

コナンは必死で女性を探した。しかし一行に見つかる気配はなかった。

「あいつだな」

「ああ」

二人の男はコナンに近づいた。

「おい、お前が江戸川コナンか？」

サングラスと帽子で少し顔を隠した男がコナンの前に現れた。

「だったらどうなんだよ？」

コナンは前の男に時計型麻醉銃を構えた。が、頭に鈍い衝撃を受けた。その場に倒れ込んだ。

「うつ」

コナンは頭を押さえた。

「えっ!？」

その声に灰原は今まで以上に周りを見渡しコナンの声にたどり着いた

「工藤君!?!」

灰原がコナンに近寄ろうとした。

「く、くん！ 警察いけ！！」

朦朧とする中コナンは叫んだ。

しかし時すでに遅し。灰原は背後から薬をかがされ気を失った。コナンもまたその光景と共に気を失った。

「成功だな」

「ああ、でもこの嬢ちゃんどうします？」

「仕方ない。こいつも連れてくぞ」二人をおぶり車に乗せた。

「数十分後」

「工藤君、工藤君！」

灰原の呼び掛けでコナンは起きた。

「いつ……」

先ほど殴られたところを咄嗟に押さえようとしたが後ろ手に縛られているのに気付いた。

「大丈夫？ 怪我してるみたいだけど」

「ああ、大丈夫だ。でここは？」

そうは言うもの未だクラクラする頭を必死にたえているのに灰原は気付いた。

「大丈夫っていえる状態？ それに“ここは”って私が知ってるわけじゃないじゃない。もう少し横になってたほうがいいんじゃない？」

「いや……大丈夫。それよりごめんな」

「どうして貴方が謝るの？」

灰原はコナンの謝る意味が分からず首をかしげた。

「あいつら俺をしってた。俺を捕まえるのが目的だった。だけどオメーが近くにいたから現場をみたから巻き添えくらったんだよ」

「なるほどね。つくづく不幸な探偵さんね」

「うっせー」

ムスツと拗ねるコナンにフツツと笑う灰原。そんな話を低く聞き覚えのある声が入ってきた。

「よお！ お目覚めかい？ ガキ共」

コナンの顔が一気に変わった。

「お前らまさか！？」

「お気付きか？ t w o - m i x いらいだな」

コナンの顔が先ほどよりもきつくなった。

「誰？」

灰原はコナンに小声で聞いた。

コナンは二人から目を剃らさずに返した。

「宮原悟史……昼休みに話したtwo-mixの誘拐事件の犯人だよ」

「ほお良く覚えてやがるなお前」

クツクツと笑う宮原を灰原もきつく睨み付けた。

「嬢ちゃん睨んだ顔は似合わないぜ？」

「……」

灰原は宮原から目を反らした。

「無視すんじゃないやねえよ!!」

掌を一気に降り下ろした。灰原は目を瞑った。しかし、頬にも体にも痛みがなかった。

「……っ」

目を開くと目の前にコナンがいた。

「いつちよ前に女を守るとはな。面白い奴だ」

「こ、こいつは……関係ねえだろが……」

コナンの頬が赤く腫れていった。

「逆らうからだろうが、ガキの分際で！」

コナンの胸元を持ち上げ引き寄せた。

「無視しようが何しようがコイツは関係ねえだろ！ 解放しろよ！
関係あるのは俺だろ？ 俺が手に入ったんならコイツは必要ねえ
じゃねえか」

「ああ、女はいらねえ、だが顔を見られてる。すべてお前が悪いの
だ！いつまでも睨んでんじゃねえよ！！！！」
宮原はコナンを地面に叩きつけた。

「お前の住所と電話番号おしえろ」

「この女殺されてえか！？」

コナンの前の毛を掴み持ち上げる。もう一人の男が灰原に拳銃を頭に押し付けた。

「おら！言えよガキ！」

少しの空白の後コナンは住所と電話番号を教えた。

「フッそこで大人しくしとけよ！」また開いていた扉が閉まった。
足音が消えるまで扉をにらみ、きえたら灰原は急いでコナンに近づいた。

「工藤君！！ 大丈夫！？」

胸元を持ち上げられその上に地面に叩きつけられた為に咳き込み、
むせる。少しおきあがるには無理な状態だった。灰原はその光景を
見守るしか術がなかった。

第三話〱事件発生〱（後書き）

第三話です！

今日も投稿する事ができました！

犯人の名前でした！！

単行本15カンを参考に！

さあて、誘拐された二人はどうなるのか！？

是非最後まで見ていって下さいな！

“悪魔のいる村”が完結したのでこの話に集中して書きます。
では！

第四話　脅迫電話

同時刻
事務所

探偵団たちが事務所のドアをあけた。

「コナン君あそびませんか？」

三人は賑やかに入ってきた。

「ごめんなさいね。コナン君まだ学校から帰ってないの」

「え！なんで？ 私たちと一緒に帰ってきたからもう家にいてもおかしくないよ。だって三時だしね」

「ええそうですよ。それに灰原さんも博士の家にいませんでしたよね？」

「だな。あいつらまた抜け駆けしてんじゃねえの？」

歩美は光彦に光彦は元太にと口々に話した。

「ねえ！ コナン君が帰ってくるまで、ここにいよ！」

歩美の提案でいつものソファーにすわり賑やかに事を運んでいた。

午後四時

事務所に電話の音をが鳴り響いた。

「もしかしたらコナン君からかもしれませんよ！」

「蘭お姉さん早く早く！」

子供たちに急かされるように蘭は受話器をとった。

「よお？ 久しぶりだな！」

「だ、誰ですか？」

「ん？ お前だれだ」

「そんなことよりあなた誰ですか？」

ただならぬ声にそのばで静まりかえった。

「どうでもい、毛利小五郎が居ねえならつたえとけ！ ガキふたりは誘拐した」

「「「え」「」」

その場にいた探偵団たちが悲鳴にちかい声をだした。

「あの声聞き覚えありませんか？」

「うん。あるある」

「蘭お姉さん受話器かしてもらいませんか？」

光彦が蘭の前で右手をだした。
しかし蘭は渡さなかった。

「あ、あのガキってまさか！？」

「ああ、江戸川コナンというガキとその友達だよ！　あと近くにいるんだろ？　少年探偵団ってやつらが！」

蘭は咂然となりながら三人をみた。電話の男は今もなお怒鳴り蘭は光彦に受話器を渡した。

「久しぶりだな。覚えてるか？　お前らのせいで務所ぐらしになった宮原だ！　今から五百万毛利小五郎から現金あずかって米花駅にこい！」

「あ、あの！　コナン君たちの声聞かせてくだらない！」

光彦は精一杯の声をだした。宮原は笑いながら許可をした。

「おい！　お前らぜってえくんない！　罨だ！！　うわっ」

「そうよ！　この人たちの指図は受けちゃダメ！　私たちは大丈夫だから。あ……」

「ちょっとコナン君！　灰原さん！」

「絶対こい！　米花駅だ！　いいな！」

激しく相手は受話器をおいた。

「蘭お姉さんはやく小五郎のおじさんにつたえて……」

泣きながら歩美は訴えた。しかしもうそこには小五郎が帰っていた。

「一方倉庫では」

「ジタバタもがいてんじゃねえよ。余計なこと喋り上がって！分かってんのか？お前らの立場！」

電話をぶち切りコナンの口を宮原の手で抑えつけられた。

灰原も同様宮原の相棒に口を塞がれた。

「うー！ うー！」

必死でコナンは抵抗を試みる。しかし宮原がコナンのお腹を殴った。

「うつ！」

そのままコナンは意識を失った。

「うーーーーーー！！！」

灰原の叫びにならない声が倉庫に響いた。

「お嬢ちゃんにガムテープを貼れ。俺らときてもらう！」

コナンをそのままにし灰原を抱き上げ部屋をでていった。

「うー。うー」

「うるせえよ。あいつがどうなってもいいならそのまま暴れてろ」
その一言で灰原の動きがとまった。

第四話、脅迫電話、（後書き）

ごめんなさい

とっても遅くなりました（<―>）

そして今日で私春休み終わり。月曜から学校でも実力テストとかないからまだ投稿できます！頑張ります

月曜は待ちに待ったテレビコナン開始！

来週の明日は戦慄のフルスコア。みんな劇場へGO！！
今年の映画、コナンと歌姫が……襲撃をうけちゃう！
そして今回初中学の新一と蘭も登場！
では。

第五話　離されゆく二人

小五郎はすぐに目暮警部に連絡をいれた。

　十五分後

電話を受け目暮警部をはじめ佐藤刑事、高木刑事、千葉刑事が探偵事務所に入ってきた。

「それで？　詳しく話してくれんか？」

小五郎が今までの経路を話した。

「ふむ。やはりここにたどりついたか」

「やはりとは？」

「一週間まえに宮原が脱獄したんだよ。宮原が恨む相手は君たちだと気付いたんだが一足遅かったってことだな。それで身代金とは？」
目暮警部は探偵団に目をうつした。

「五百万っていつてました」

目暮警部と目があつた光彦が答えテーブルに指を差した。

「僕たちこれもって米花駅にいきます」

「それはいかん！　そんなことー」

「でも、相手は僕たちを指名しました。僕たちがいかなければコナン君たちがあぶないとおもいます」

真っ直ぐ光彦は目暮警部をみた。元太と歩美も目暮警部をみた。

「しかしだな……」

「お願いします」

三人は深々とお辞儀をした。
そして目暮警部が折れた。

「わかった。しかしこちらからの命令にしたがってもらうぞ?」

「わかっています」

鞆に小型発信器と盗聴機をいれ光彦の襟に小型マイクを仕込んだ。

く 倉庫 く

宮原は灰原を連れコナンのいる部屋から出て別室へと入った。

「これからお嬢ちゃんを有るところにつれていく。彼とは永遠におさらばだ」

「うーん、うーん!」

「何か言いたそうだな。ふっふっふ、一つだけ教えてやるよ。あのガキはこの倉庫と一緒に死ぬんだよ」

「うーーーーー!」

「もがいたって外さねえよ。おいこいつの目をふさげ」

「はい」

宮原から白い布を渡された男は灰原の目を隠した。

「よし！ 車に乗るぞ！」

宮原たちは車に乗り込んだ。

第五話　離されゆく二人（後書き）

先ほど失礼しました。

昨日の夜に投稿するはずだった五話。でも昨日忙しくて繰り越し今日になりました。

さて、探偵団が動き出す一方灰原がどこかにつれていかれそうです！

ここから先コナンが可哀想になるくらい痛め付けちゃう恐れありますので

「そんなのヤダ」って思われるかたbackを進めます。
大丈夫かたはそのままお進みください！

by 菜花

第六話　スピリタス

灰原を乗せ、倉庫から離れた。

「動くなよ。お嬢ちゃんは助けてやるよ」

「んー！」

「なんかいいたそうだな」

宮原は灰原のガムテープをはがした。

「“お嬢ちゃん”って江戸川君をどうする気！？」

「あのガキは明日には死んでるよ」

「え！？　どういうこと！？」

「もうおしゃべりは終わりだ」

「ちよっ！　待つて！　んー！」

宮原は暴れる灰原をいとも簡単に取り押さえ口をふさいだ。

　　倉庫

　　コナンの監禁場所

宮原が出ていってからおよそ二十分がたとうとしていた。

「……っ」

体を起こそうとしたが腹部に痛みが走り立つことが出来なかった。

「はい……ばら？」

当たりを見渡してみたがコナン以外だれも居ないことに気付いた。

「灰原！？」

先ほどより大きめに声をだしてみるもののなんの意味もなかった。

「あのお嬢ちゃんなら別の倉庫につれていったよ」

「宮原！！」

ドアが開き宮原が入ってきた。

「灰原をどうする気だ？」

「フツ時間稼ぎだよ。お前を殺すためのな」

「何？！」

「と、その前に身体検査だ」

「は！？ 検査する必要があるのかよ」

「ああ、携帯とかな。お前がもってるものすべてだ」

宮原はコナンに近づき目についた腕時計、眼鏡を外し一旦縄を外した。

案の定暴れるコナンを相棒がおさえつけ身動きが取れなくなったのを見計らいジャケットを脱がせた。その弾みで携帯と探偵バツジがおちた。

「洒落たもん持つてるじゃねえか」

「この蝶ネクタイも怪しいぜ！　うしろに機械らしきものついてるぞ！」

取り押さえていた相棒からの声に宮原はコナンに近づき蝶ネクタイを外した。

「ハント。身体検査して正解だったな」

「よし、コイツを縛れキツくな！」

今のコナンはジケツトをとられ白のカッターだけとなり、ひんやりした冬の倉庫では白い息がでるほどさむかった。相棒はコナンの体全体を縄で縛った。

コナンは未だ宮原たちを睨んだ。

睨むコナンに宮原は何かをかけた。

「酒か……？」

体からの匂いに驚くコナン。笑いながら宮原はコナンの顔面にかけた。

「ゲホゲホ……」

「ああ良く解ったな。スピリタスと水を薄めたものだ」

二・三回かけたあと頭からバケツに入ったそれを全てかけた。

「まるで濡れ鼠だな。バカめ、お前が俺たちを捕まえなきゃこんなことにはなつてなかった。恨むんなら自分を恨め。よし、声上げられたら居場所がわかる。ガムテープで口をふさいどけ!!」

「うわっ！ んっ！ うー」

宮原の命令で相棒は暴れるコナンにガムテープをはった。

「最後までいい夢みるよ。そうだ。この眼鏡とバッジと携帯はこわさせてもらうぜ?」

眼鏡や携帯を地面にむけ思いっきりたたきつけバッジは宮原が踏みつけ宮原たちは出ていった。冬の倉庫で全身が濡れているためコナンの意識は薄れ始めた。

（ヤベ……このままじゃ、まじであの世行きだ……どっか抜け道ねえか!?!）

目だけで探してみるが縛られた状態ではどうすることもなく、出口も無かった。

悴む手を動かして縄をとこうとしたがそんな体力さえどこにもなくただ意識が遠退くだけだった。

そしてコナンの意識は暗い闇に落ちた。

第六話〜スピリタス〜（後書き）

関係ないようである題名“スピリタス”でしたが関係ありました^^
ほんとに凄い事になってます。今後みんなどう動くのでしょうか？

ここで中間地点かな。

もう少し続きますのでお願いします。

では

第七話　運命共同体

　　～米花駅～

探偵団たちは米花駅についた。辺りをみわたしていると公衆電話が鳴り響いた。

「もしもし!？」

「次杯戸駅にこい」

「え!　もしもし!！」

聞き直す間もなく電話は切れていた。

「何て言ってたの？」

「杯戸駅にこいと言ってました……」

「じゃあ行こうぜ!」

元太の合図で券売機で切符をかい電車のホームに向かった。

「ねえコナン君たち大丈夫かな?　哀ちゃんなんてこの事件に無関係だったのに……」

歩美の泣きそうな声に光彦が戸惑いながら答えた。

「だ、大丈夫ですよ。僕たち探偵団は無敵です」

「そうだぜ歩美!　俺たちであいつらを捕まえようぜ!」

「そだね……」

返事はかえってきたもののまだ不安な顔はかくせなかった。

「あ、電車きましたよ」

三人は電車にのり杯戸駅に向かった。

「コナンの倉庫から数メートル離れた倉庫」

二人は灰原を車から連れ出し倉庫に向かった。

宮原の相棒はある一室に灰原を連れ込んだ。

「んーんー!」

灰原は必死もがいた。

「静かにしろっつてんだろっが!!」

相棒は怒鳴るものの灰原は静かにしようとしなかった。

「おい、どうした?」

振り向くと作業の終わった宮原が立っていた。

「いや、このお嬢ちゃんがうるさくてよ……」

「一体、何なんだ。」

宮原は灰原に近づくと、目隠しと口のガムテープをはがした。

「あなた達、江戸川君を殺す気なのよね？」

「そうだが、それがどうした？」

「お願い！私を江戸川君の所に戻して！」

「何だと？」

「彼を殺す気なら、私も一緒に殺して！私と彼は運命共同体なの。死ぬ時は一緒に死ぬ運命なの！だからお願い！！」

灰原は宮原に必死に叫び、首だけお辞儀をした。

「フン、それは出来ねえ相談だ。いくら頼まれてもな。それに元々オレ達が用があるのはあのガキだからな。」

「ふざけないで！あなた達みたいな最低の人間に、江戸川君の命を操作する権利なんかないわ！！」

「フン、うるさい嬢ちゃんだ。」

宮原はそう言うと、灰原の口をハンカチで塞ぎ眠らせた。

「うつ……ひきよ……よ……」

「最後までうるさいお嬢ちゃんだな。よしこの嬢ちゃんに目隠しと

ガムテープをしておけ。」

宮原はそう言うと、そのまま奥へと行った

一方

コナンのいる倉庫

コナンは異様な臭いに目を覚ました。

（！！煙？）

鍵の閉まってる扉からもくもくと煙が出ていた。

（ヤベ……あいつらじわじわ殺すき満々だな。このままじゃ一酸化酸素中毒で丸焦げる前にお陀仏じゃねえか……）

今ある力を使って懸命に縄をとこうとした。しかし寒い中ずっと薄着でいたコナンの体は思っていた以上に危険な状態だった。

「ンンッ（ゴホッ）ンンッ（ゴホッ）」

コナンは咳にならないような咳をした。煙は先ほどより遥かにおおく部屋をおおっていた。

第七話　運命共同体（後書き）

投稿できた～～（　　）

昨日の予定が今日になってしまいました……。

さてさてやっと

行動開始探偵団！

宮原も行動開始！

さあどつちが先！？

助かるか否か！！

明日映画公開！

待ち遠し～～～～～！

第八話　見つかったのは？（前書き）

一週間とびましたが来てくれてありがとうございます
では先へお進み下さい

第八話　見つかったのは？

〔杯戸駅〕

探偵団たちは杯戸駅の改札口をでて、公衆電話の近くまで走った。そして案の定公衆電話から呼び鈴がなった。

「もしもし！」

「杯戸駅から北。永戸倉庫にこい」

それだけ言うと乱暴に切れた。

「永戸倉庫……有りました！　ここですね！」
地図をみて光彦は位置を確かめた。

「でもこんなとこまで歩いて行けないよ」

「ですね。かといってタクシーに乗るお金もありませんし」

その時、駅のロータリーからクラクションの音が聞こえた。

「あなたたち車に乗りなさい」

車から顔を出したのは佐藤刑事だった。三人は佐藤刑事の車にのつた。

「それで、何処に行けばいいの？」

「あ、はい永戸倉庫です」

「分かったわ。シートベルトしっかりね」

佐藤刑事はパーキングからドライブにかえ発進させた。

「ねえそれより光彦君博士から何をもらったの？」

「これですか？」

光彦がポケットからだしたのは予備のメガネだった。

「博士がもし灰原さんに出会ったらわたしにくれってたのまれたんですよ」

三人はコナンがいつもつけてるメガネを眺めた。

〈永戸倉庫〉

佐藤刑事たちがきてから数分後目暮警部たちが到着した。少しの間待ってみるが相手は現れず、倉庫の中を高木刑事と佐藤刑事が見回るよう命令された。

二人の刑事は警戒しながら倉庫に入った。しかし中にも誰もいなかった。

「部屋すべて調べろ」

目暮警部の命令で各部屋を調べた。

「ここだけ鍵がかかってます。ほかは誰もいません」

高木刑事が報告をした。刑事たちは鍵を壊し中に入った。

「女の子が一人います」

高木刑事の声に探偵団が反応し駆け寄った。そこにいたのは眠らされて両手首足首を縛られた灰原だった。

「哀ちゃん!!」

歩美が灰原に駆け寄りガムテープをはがして呼び掛け、佐藤刑事が手足の縄をかがした。

「灰原さん!」

「おい灰原!」

探偵団は必死によびかける。次第に灰原の意識が戻り始めた。

「……っ……」

「哀ちゃん大丈夫!？」

「ええ……」

まだ朦朧とする意識の中佐藤刑事の声が聞こえた。

「ねえ何があつたか話してくれる?」

「宮原つて人に誘拐されて……そつだわ江戸川君が危ないの!」

一気に灰原の記憶が戻った。

「目暮警部! こんな紙が」

目暮警部は手紙を受け取り読み上げた。

「『お嬢ちゃんは返す。金はこの倉庫においていけ』」

「それより彼女を病院に!」

佐藤刑事は灰原たちがいたほうに振り向いた。
しかし探偵団と灰原の姿がなかった。

第八話　見つかったのは？（後書き）

ごめんなさいごめんなさい！！

ずいぶん遅れてしまいました。ごめんなさい

さて、灰原さん発見！そして、倉庫抜け出し向かう先は！？

安静にしておかなきゃ灰原さん！って思う方もいますよね。

でも、自ら助けに行こうとしそうじゃないですか？

だって殺されること知ってるから。

今回コナン出てきませんでした。どうなっているのやら

それは次回のお楽しみ

また一週間あいたらごめんなさい

では

第九話　決死の介抱

灰原と探偵団はさっきいた倉庫を脱け出し少し走ったところでまとった。

「は、灰原さん……大丈夫なんですか？　安静にしてなくても……」

息を切らせながら灰原に聞いた。

「ええ」

「灰原さん。博士がこれを渡してくれっていわれました」

光彦が差し出したのは追跡メガネだった。

「ありがとう」

灰原は早速電源をつけ位置を確認しようとした。が、点滅はしなかった。

「哀ちゃん？　どうしたの？　顔色悪いよ？」

「江戸川君の反応がないのよ……まさか……だれか地図もってる？」

焦る気持ちを抑え光彦から地図を貸してもらい現在地から近い倉庫を調べた。

「ここから三つ……」

地図を確認したのちまた走り始めた。

走ること二時間あたりはもう薄暗くなっていた。そのなかに煙の出ている倉庫を発見した。

「近くに公衆電話を探して警察に連絡して！？」

探偵団たちに灰原は命令をした。

「あ、哀ちゃんは!？」

「江戸川君を助けに行くわ」

「無茶です!灰原一人じゃ!！」

「大丈夫だから早く電話を探して!間に合わないわよ!！」
三人は電話を探すため来た道を折り返し走った。

「これであの子達は大丈夫ね。待って工藤君……」

灰原は倉庫へと向かった。

く 倉庫く

ますます煙が密室の部屋に充満していた。コナンも気を失う寸前だった。

その時一枚の窓ガラスがわれ灰原が入ってきた。

「工藤君!！」

灰原は直ぐにコナンにかけより、口を塞いであったガムテープを外した。

「ゲホゲホゲホ」

今までの咳がいつきにでるかのようにコナンは咳をし始めた。

灰原は手際よく縄をほどき自分の来た方を振り向いた。
しかしその場は火の海になっていた。

「ちよつと工藤君ずぶ濡れじゃない!？」

今更ながらコナンが全身濡れていることに気付いた。

「スピリタスと……水の……混合物を……かけられた」

蚊の鳴くような小さな声で濡れてる理由を話した。そして灰原は冷えきったコナンをキツく抱き締めた。

「は……灰原?!」

「黙ってなさい。このままじゃあなた死ぬわよ!!」

数分間コナンは灰原によって抱きしめられ回復をまった。

それでも、コナンの体は冷えきったままだった。

その間も火は勢いを増す一方だった。

灰原は自分の上着を脱ぎコナンにかけ床にそつと寝かせた。灰原は鍵の閉まった扉に体当たりをしてみる。しかしびくともしなかった。

第九話　決死の介抱（後書き）

大変長らくお待ちしましたm（　　）m

進展してなかったらすみません。

コ哀的な話しになっているでしょうか。
不安です

がっかりさせたらすみません

では

第十話　脱出・病院に

電話をかけおわった探偵団は煙の上がっている倉庫に向かった。

「あれ誰でしょか」

光彦がみたのは二人の大人だった。

「あいつら火つけてるぞ!!」

元太の声に二人の男は姿を眩ました。

「急ぎましょう!」

三人は全力で走った。近くまで行くと倉庫の一部が勢いよく燃えていた。

「ねえもしかしてここにコナン君がいるのかな?」

「でしょうね。それに先に助けにきた灰原さんも」

「え!? 哀ちゃんもいるの……」

「多分ですが……」

「おーいこっから入れるぞ!」

元太はまだ火が着いていない場所から手をふった。光彦たちはそこに駆け足て向かい火がまだ引火していないことを確認して中に入った。そのまま突き進むと鍵のかかった部屋にたどり着いた。

「コナン君! 灰原さん! 居ますか?」

光彦は大声で叫んでみた、すると灰原の声がかえってきた。

「よし! この扉ぶち壊すぞ!!　せーの!!」

元太が扉に体当たりをした。それをみた二人も体当たりを始めた。

外から聞こえる掛け声と鍵がメリメリ壊れていのをみつつ先ほど地面に寝かせたコナンのもとにかけより、コナンを確りおぶった。

「ワリイ……」

「喋らないで！次喋ったら気絶させるわよ！？」

謝ろうとするコナンに釘をさした。

そして何十回目かの体当たりで扉の鍵が壊れた。

三人は息を切らせながら歩み寄ってきた。

「よし逃げるぞ！ おれがコナンをおぶってやるよ！！」

元太は殆んど意識のないコナンをおぶり光彦を先頭に元太、歩美、灰原の順に倉庫を出た。

倉庫を出るとパトカーや救急車がきており消防車が消化活動を開始していた。コナンは意識がなく灰原も少し火傷をおっていたので病院へと運ばれた。

第十話ゝ脱出・病院にゝ（後書き）

GW最終日に投稿出来ました。

いかがでしたか？

今回ちょっと短めでしたが次は病院編です！

では

第十一話　乙女心

コナンと灰原の身体は米花病院へと向かった。

灰原は二・三日で退院できると言われたがコナンは体力も精神も限界が近かったため一ヶ月の入院となった。

「目暮警部！」

「なんだ？」

コナンが眠る病院に慌てて高木刑事が入ってきた。

「あれからあの倉庫を見張っていましたが犯人らしき人が近づいた形跡がありません」

「うむ。狙いは金じゃなくてコナン君の命と言うわけか」

「そのようですね。どうします？」

「千葉を倉庫付近に張り込ませ」

「は！」

「佐藤・高木は少しばかり作戦をたてる」

目暮警部は小五郎と蘭に目で合図してコナンの部屋から出ていった。
「僕たち灰原さんのところへいつてきますね」

光彦と元太は走って灰原の部屋に行った。

「灰原の病室」

病室にはベッドの上で座る灰原と椅子に座って話してる歩美だけ
いた。

「ねえどうして先に乗り込んだの？」

「え？」

「コナン君のところ！哀ちゃんすごい無茶したんだよ。」

「そうね。あの時無我夢中だったからかってに体が動いてたのよ」

「そっか。哀ちゃんってもしかしてコナン君のことす、す……好き
なの？」

灰原は一瞬思考が回らずに固まった。

「……バカね違うわよ」

「で、でも！」

歩美の顔はみるみるうちに赤くなった。

「前もいったじゃない……」

「前と今じゃ感情なんてかわると思う……歩美には嘘つかないで！
！」

赤くなつてた顔は少し怒つた顔になつてた。

「歩美わかるもん。哀ちゃんがコナン君のことが好きつて。ねえどうなの？」

目を大きく見開いていた灰原は寂しそうな顔になっていた。

「私にもわからないの江戸川君をどう思つてるのか。好きなのか。でも、あの倉庫で、江戸川君を失いたくないつて思つたの」

「そつか。ありがとう正直な気持ち言つてくれて」

ニコニコする歩美に今更ながら灰原は顔を赤くした。その時光彦と元太が病室に入つてきた。

「灰原さん大丈夫ですか？」

「え、ええ」

「あれオメー顔アケーぞ？」

「そ、そんなこと無いわ」

突然入つてきた二人に灰原はあたふたしていた。

「ねえ！ コナン君大丈夫だった？」歩美は咄嗟に話しの内容をかえてくれたため灰原はほつとし目で“ありがとう”と合図をいれた。

「大丈夫かどうかはわからないそうです。目を覚ましてくれたら百パーセント大丈夫なんですが……」

「そっか……大丈夫だよね」
歩美は深刻な顔で下をむいた。

「コナンなら大丈夫だぜ！あいつしぐでーもん！」

元太は胸をはって言い切った。その言葉に光彦も頷いた。

「そろそろ六時です。二人とも帰りましょう」

光彦は時計をみながら焦った顔になった。

「じゃあね哀ちゃん！」

三人は手をふり病室を出ていった。

「いいかこの作戦でいくぞ」

「は！」

夕暮れの一室である作戦がたてられていた。そしてコナンの病室から見舞い者が全員帰った。

〔夜中〕

「米花病院ここだな……」

「あのガキも運がいいな」

「フン。それも今日までだ。いくぞ」

暗い道を二人の男が不適に笑い病院へと向かった。

第十一話　乙女心（後書き）

哀ちゃんの気持ちちゃんと表せてないですね（苦笑）
凄い曖昧……

でも、“好き”なのかな。

今回平和でした。

しかし最後に暗い影が　＜

どうなる！？江戸川コナン！

では

あと数話です

第十二話 嵐（前書き）

蘭派back!大丈夫方々GO

第十二話　嵐

「真夜中」

二人の男の影がずかすがと病院の廊下を歩いていた。

「有りましたよ。“江戸川コナン”の病室が！」

二人はコナンの病室の前で不適な笑みを見せた。

「お前はそこで見張ってろ」

「はっ！」

相棒を残し宮原はコナンの病室に入ってしまった。

「ハッハッハお前もしぶどい奴だな」

宮原はコナンの口と鼻を押さえた。今まで意識の無かったはずのコナンがもがきだした。

「死ねよ。死んで楽になれ！」

もがくコナンを笑いながら動きが止まるのをまつた。

「そこまでた！！」

「何！？」

「警視庁の目暮だ！」

「フン！ガキがみえねえのか！？ さつさと道をあけて貰おうか」

コナンを左手で持ち上げ首にナイフを突きつけた。

「江戸川君！！」

警察と口論の中灰原が入り警察の人より二歩ほど前に出た。それと呼応するかのようにコナンが目を覚ました。いつもの癖で右手の時計に手を伸ばしたがそこには時計など無かった。

「これはこれはお嬢ちゃん。助けてもらったのにこんなところにいてもいいのかな？」

小さな子供に説明するかのように灰原に話しかけた。

「ええ。貴方が江戸川君を返してくれるまで動かないわ」

「ちょっとあなた！早く出なさい！！」

佐藤刑事が灰原の手を掴んだ。

「嫌よ」

灰原は動こうとしなかった。宮原は一步一步灰原に近づいた。

「それ以上……はい……原に……近づくな……」

途切れ途切れだけでも言葉の一つ一つははっきりしていた。

「バカめ！ お前がでしゃばった所でなんにもかかわらねえよ！」

灰原に近づくに連れ佐藤刑事が銃を構える。

宮原はゆっくり笑いながら灰原に近づく、コナンは佐藤刑事に合図を送り宮原の腕を噛んだ。宮原はコナンを地面に叩きつけ驚いているうちに一発の銃声が聞こえた。

宮原はその場にしゃがみこんだ。

宮原自身なにが起きたのかわからずにゆっくり立ち上がったが太股の痛みにしゃがみこんだ。

「逮捕だ！！！」

目暮警部の叫びで高木刑事と銃をしまい終わった佐藤刑事が宮原に手錠をつけた。

灰原は透かさずコナンに駆け寄った。

「江戸川君！！」

今にも泣き出しそうな顔にコナンは苦笑した。

「泣いてんじゃねえよ」

「泣いてなんかないわよ！ あなたはいつもいつも無茶して！ どれだけ心配したとおもってんのよ！ バカ！」

泣いてないといいながらも瞳からは安心した涙があふれでていた。

「わりって。ああでもしなきゃあいつお前を捕まえようとしてた。それだけは絶対嫌だからついな」

「自分の身くらい自分でまもれるわよ！」

きつい言葉をいいつつも灰原はコナンをギュッと抱き締めていた。二人のやり取りを皆がみながら宮原と気絶させられた相棒は警察へと連行された。

第十二話　嵐（後書き）

着々と終わりに近づいています。

哀派　いかがですか？ちゃんとコ哀になってるでしょうか？　あま
り期待に答えられなくてごめんなさい

蘭派　こちらからみるとムカムカしたりしないでしょうか？　最後
にコナン　哀に告白シーンがあります。そこで少し蘭に触れます。
傷つけてしまうと思います。

大丈夫でしょうか？

しかし蘭に対する嫌みなどは書いていませんので。

こんなダメ作者ですが最後までお付き合いお願いします。

最終話　巡り来る春に

警察が出ていった後も灰原はコナンをしっかりと抱き締めていた。コナンも灰原の背中へと手を回した。

「サンキューな灰原」

すうっとコナンの力が抜けていくのを灰原は肌で感じた。そのまま灰原にもたれ掛かった状態でコナンは眠りについた。その顔は笑顔だった。

「バカ……」

灰原はコナンをベッドに戻し自分の病室に戻った。

次の日

コナンが目を覚ましたときには探偵団が心配そうにコナンを見ていた。

「気が付きましたよ！」

「良かった！」

次々喜びの声が聞こえ光彦は先生を呼びにいった。

その後コナンを気遣い早めにみんなは帰った。その入れ換えに灰原が病室に入ってきた。

「もう大丈夫なの？」

「ああ、大体はな」

灰原は安心して先ほどまでみんなが座っていた椅子に腰をおろした。
二人は何も言わず沈黙が続いた。

「ねえ」

「あのさ」

二人の声が重なった。

「お前から言えよ」

「遠慮しとくわ。貴方が先に言いなさい」

また少しの沈黙。それを破ったのはコナンだった。

「あ、あのさ……」

「何？」

「俺灰原のこと……」

コナンの顔が徐々に赤くなり始めた。

「じれったいわね。早く言いなさい？」

「わあつたよ！……俺、お前のこと好きだ！！」

顔が真っ赤になり勢いで言ったためにコナンは息を切らした。

「あら、奇遇ね。私も同じこと言おうとしたわ」

「え？」

「自信満々で、事件に飛びついては、ひやひやさせる。人を守るた

めに自分がどうなってもいいそんな人が好き」

灰原はしっかりとコナンをみた。

「……じゃあお前……」

コナンは言葉が見つからずたじたじになる。灰原は不適に笑った。

「なあんてね。“好き”の言葉は私にいつしゃいけない言葉よ。貴方には蘭さんがいる。あの人を不幸にしてまで私は幸せになっちゃいけない」

灰原はコナンから目を背け膝の上で拳を作った。

「それでも、俺はお前が好きだ。灰原哀をな。元に戻ったら蘭に話す。ちゃんと話すから……お前の正直な気持ち教えてくれねえか？」

真面目な顔で言うコナンに顔を合わせなかった灰原が真っ直ぐコナンに向き返った。

「私も貴方のことが好き……これが私の気持ち。これで満足かしら？」

「ああ」

満足に笑うコナンに自然に二人は笑みを浮かべた。

「ありがとう……」

小さすぎる声もコナンにはちゃんと届いた。

二人っきりの病室。

二人が好きと伝えた春先の夕空。まだやらなきゃいけないことがあれど乗りこえられると信じて生きる。人生の一握りの幸せを求めて……

完

2008年5月16日

最終話〜巡り来る春に〜（後書き）

はい！最終話です！

こんな感じに終わってごめんなさい。物足りないかもですよね……でも私はこんな感じに終わるほうが好きなのです

「巡り来る春に」ガーネットクロウさんのタイトルそのまま着けさせていただきました。

「巡り来る春に、旅立つ足音花の日にみおくられて……」
頭の中でずっと流れていたので、

まだ春になってないこのタイトルにしました。

〜お知らせ1〜

最終話なのに連載中なのはどうして？

って思われてる方多いいれのでは？

その理由を教えます。

この話おまけを作っています。病室に宮原が入ってきてもし警察がいなかったらっていうパターンです。（リクエストありましたので書きました）

〜お知らせ2〜

6月15日から6月29日まで休みます。

―理由―

二週間実習に行きます

なので其までにおまけも完成させて投稿します。見たいかただけ見てください。

くお知らせく

テレビアニメのコナンシリーズが“殉職”で終わりです。
三週間お休み（プロ野球のため）6月16日から再スタート。オー
プニング・エンディングが変わる予定。

色々書いてたらもう書く量がすくない。

コメント下さったかたありがとうございます。

沢山のやる気を貰いました。

そしてポイントが“悪魔のいる村”より多いことに驚いている菜花
です。

ほんとにありがとうございます

長々ごめんなさい

2008年5月16日

菜花

おまけ〜前編〜（前書き）

ボツにした作品リクエストがありおまけとして、更新します。
この話しにおまけが要らないかたbackしてください。

おまけ 前編

暗い廊下を歩く二人。

「ありましたぜ。江戸川コナンの病室」

「お前は見張つてろ」

「はっ！」

宮原はコナンの寝ている病室へと入った。

「次は失敗しねえ！」

宮原は寝ているコナンを抱き上げ病室を出ようとした。しかし寝ていた筈のコナンが目を覚ました。

「お、おまえら！」

コナンは渾身の力でもがいた。

「チィ！間が悪い！おい！」

「はい！」

相棒は暴れるコナンに薬をかがした。

「うつ……」

もがくコナンの体が次第に静止した。

宮原はそのままずかずか帰った。

「次の日」

目暮警部たちが病室に駆け付けた時にはコナンの姿はなかった。灰原が啞然としたのちすぐ、発信器の事を思い出した。

（彼の位置わかるわ……）

素早く自分の病室に戻り服に着替えて飛び出した。手には追跡眼鏡。灰原は携帯で博士を呼び出した。

五分後駐車場に博士の車が入ってきた。灰原は車に乗り、博士に地図をみせた。

「ここにいて！」

「わ、わかった。しかしー」

「もたもたしないで！彼が危ないの！！」

車は慌ただしく発進された。

「一方暗い倉庫」

「よし、準備できましたぜ！」

「ああ。後は嬢ちゃんがくるだけだな」

「分かりますかねえ」

「分かるさきつと。前の倉庫に近いからな」
不適な笑みを浮かべながら眠るコナンを見下ろし別の部屋へと歩いた。

「ここだわ。博士私が十分たつても戻ってこなかったら警察に電話して？」

「じゃが……哀君一人で行くのは危険じゃ！」

「私がいかなきゃダメなの！！お願いいかせて！」

灰原が真剣な顔で博士をみた。

「わ、わかったよ。それと、此をもっていきなさい」

博士が紙袋を灰原に渡した。

その中にはキック力増強シューズが入っていた。

灰原は受け取り倉庫へと向かった。

重たい倉庫の扉をを必死で開け自分が一人入れるくらいの幅に無理矢理入った。

その先にグッタリ柱に縛りつけられたコナンがいた。灰原は周りを警戒しながらコナンに駆け寄った。

「工藤君！工藤君！」

起こして見るが反応がなかった。そしてコナンの横に置いてあるデジタル時計のついた、白い箱を見つけた。

（！？ 爆弾！）

灰原は爆弾の前に行き、念のため戻って来ていたソーイングセットから小さなハサミを取り出した。

カバーを外し中をみる。灰原は驚いた状態で動けなかった。

爆弾の線はほとんど解体してあったのだ。残って要るのは白い線が二本。

時間は一分をきった頃だった。

（ごめんなさい……工藤君）
目を瞑り左のコードを切った。

電子音も消えたシーンとした。

灰原が恐る恐る目を開けた。
残り時間十五秒の所で止まっていた。

急いでコナンのロープを切り、必死で起こした。
「う……はい……ばら」

意識が戻ったコナンに灰原は安心感があった。

「これはこれはお嬢ちゃん」

不適な笑みを見せた宮原。その後ろから倉庫の鍵をしめる相棒の姿があった。

おまけ〜前編〜（後書き）

ありがとうございます!!

後編も時期に後編しますので！

おまけ 後編

灰原はコナンを解放したのはいいが後ろに宮原が立っていた。

灰原は咄嗟にコナンを庇った。

「あら、貴方たちから出向いてくれて嬉しいわ。警察にでも捕まる気になったのかしら？」

灰原もまた不適な笑みを見せた両者とも不適に笑い合う。

「強気だな。もう逃げられまい。それにその爆弾は偽物だ」

宮原は勝ち誇った顔をしながら徐々に灰原たちに近づく。

灰原は後ろ手に靴を差し出した。

それを見るなりコナンは笑みを浮かべた。

「一発で決めなさいよ」

「ああ」

小声で言い合い、コナンはそつと靴をはいた。

「別に強がってなんかいいわ。それに偽物でも今日であなたは終わりよ」

宮原の笑いが止まり怒りをあらわにした。

駆け寄って来そうな勢いで灰原に足を向けた。

「あなたに勝ち目なんてないわ」

灰原は直ぐに端に寄った。

その瞬間勢いよくボールが飛んできた。宮原は避けきれず思いつき
り後頭部にあたりそのまま天井にあたり相棒までノックアウトした。

コナンはそのまま息を切らせながらズルズル座り込んだ。その光景
をみて灰原がコナンを支えた。

「サンキューな灰原」

「感謝するのは私のほうよ」

外ではパトカーの音で騒がしかった。

目暮警部たちは扉を壊し突入した。が、犯人二人がのびているのに
気付き啞然とした。

佐藤刑事はコナンたちに駆け寄った。

すでにコナンの意識は無く灰原が支える体制だった。佐藤刑事がコ
ナンをおぶり倉庫を出た。倉庫の前に待機してた救急車によって病
院に送られた。すぐに、自分たちの病室に行きコナンをベッドに寝
かせた。

「あなたも病室に戻りなさいよ」

一言言い残し佐藤刑事は病室からでていった。

灰原はコナンの手を握りしめ祈り自室に帰った。

（最終話“巡り来る春に” 行ってください）

おまけ〜後編〜（後書き）

長くお待たせしました。

これで

炎の恨み〜flameforgudge〜

完結です。いかがでしたか？

イマイチな作品だったら作者の力不足です。

評価感想いただけたことホントに感謝しています。

ありがとうございます。これかもファンでありますように…

間違いだらけの読みにくい作者より

完

2008年5月29日

菜花

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0306e/>

炎の恨み～flame of grudge～

2010年10月10日14時51分発行